

## 内外交差点

# マヤの遺跡と社会主義のリアル タクシー世界一周記<南米編③>

成川 史華氏 (扇交通社長) 第5/12回

メキシコで日本人にも人気のリゾート地・カンクン。私が滞在したのはリゾート地ではなく、市街地だった。マヤ文明のツアーを予約し、翌朝、指定された場所から出発30分前から待機していたものの、待てど暮らせどバスが来ない。ホテルの人に電話してもらおうと、「忘れられていた」らしい。日本では出会えないハプニングに泣きそうになった。結局、別のバスで無事にマヤ文明の遺跡を見ることができた。シャーマンにもお会いして、占ってもらい笑顔で私の未来を語ってくれたけど、英語でもスペイン語でもなかったから、チンプンカンプンだった。

陽気で明るく楽しいだけではない——と言うのも、この街のリアルだった。散策していた際に真っ黒な男性に「Hi, Japanese!」と声をかけられ、振り返ると「もっと気持ちよくなることしない?」とタバコの仕草を見せた。ドラッグを勧められたと分かった瞬間、一目散にホテルに走った。忘れられるわ、アクセサリーを売りつけられそうになるわ、ドラッグに誘われるわ…。カンクンに嫌気がさして、世界で最も美しい海の一つと言われるコスメル島近くのプラヤ・デル・カルメンへ。バスを降りたのは午後11時。走って宿に行かなきゃ…と思いきや、バスターミナル前の広場はライトアップされ、音楽が流れ、大人たちはお酒片手に踊り、子どもたちも遊んでいる。至るところで路上ライブが開かれ、土産物屋も閉める気配がない。街の人と観光客が一緒になって、この瞬間を楽しんでいるのだ。

宿へ向かって歩いていたとき、後ろから声をかけられた。声の主は親日家の青年で、振り返る間もなくアニメの話始めた。「行ったことはないけど、日本が好き」とアニメや漫画の話をしながらか、宿まで案内してくれた。カンクンからバスで数時間離れたところにある町ではスリやドラッグにおびえることのない、優しく陽気な人々と噂通りの美しい海のおかげで気持ちが晴れていった。

南米の旅の締めくくりに訪れたのは、キューバ。空港を出ると、ピカピカに磨かれたアメ車のタクシーが並んでいた。まるで映画セットのような景色が広がる。事前に「出発ロビー側で、乗客を降ろしたばかりのタクシーを拾えば地元価格で乗れるよ」と聞いていたので、階下に移動して出発口で待機。何両かには断られたものの、1人の乗務員

さんが応じてくれた。他に乗り合わせの客もいて、相乗りでハバナ市内へと向かった。

市内にはサムソンのモニターがいたるところにあり、サイネージ



広告が映し出され、通行人の多くはスマホを持っていた。近代化の波が確実に届く一方、街には明らかな貧富の差もあった。通貨は観光客用と地元用の2種類。現地通貨での買い物は格安だが、両替には2時間以上並ぶこともある。タクシーもユニークで、ピカピカの観光客用のアメ車、ボロボロのレトロな車、バイクタクシーなど多種に渡る。手を挙げれば他の人が乗車中でも停まって行き先を聞いてくれる。ほとんどバスのようなシステムで、料金体系は謎だけど「乗せられるなら乗せる」という柔軟さだった。観光客には観光価格、地元民には地元価格。「元祖コーラ」や特別な葉巻を高値で売りつけられるなど、良い思い出だ。

マチュピチュを目指し始まった今回の旅も、無事に終了。見たいものは見たし、行きたい所には全て行った。満足だ。次の旅に備え、一度、カナダに帰ろう。危険な目にあう確率もかなり高い南米。特に日本人の女一人は狙われやすいと聞いていた。私が「南米に一人で行く」と言ったとき、父は「帰ってこんやろうなあ」と思ったらしく、多額の死亡保険をかけていたのも、今となっては笑い話だ。

私が安全に旅を終えられたのは、カナダで聞いた「Trust your feelings」という言葉のおかげかもしれない。「あかん」と思ったら人の多い場所へ避難し、お金はかなり分散して隠し、携帯は常に首からぶら下げていた。寝ているときも例外なく、24時間セキュリティポーチが私のお腹を守っていた。嫌だなどと思えば街を去り、気に入れば滞在を一日延ばす。この言葉があつてどんな時も自分が感じたことを大切に行動を起せたのだろう。

トイレトペーパーを持ち歩かないと外のトイレに入れないような国々、公園のトイレすら清潔な日本。電車の時刻表があてにならない国々、時間通りに運行する日本。タクシーは相乗りが当たり前で、ヒッチハイクも移動手段になる国々、公共交通機関としてタクシーが存在する日本。文化も考え方もまったく違うけれど、それぞれの国に、それぞれの良さがある。

でもやっぱり、深夜に女一人で出歩いて、小学生が一人で電車通学して、タクシーに乗っても「変なところに連れて行かれないか」とビクビクせずに済む国——。

日本、サイコーだっ。